

イチゴ高設栽培における培地の運用が収量に及ぼす影響

イチゴの高設栽培における培地の運用は、4年目には減収する

背景・目的

- イチゴの高設栽培では、培地の運用が生育や収量等に悪影響を及ぼす事例が散見されます。
- 杉皮バークの運用が培地のECやpH、収量に及ぼす影響を明らかにしました。
- 宮崎県内に流通しているイチゴ培地を利用した場合の収量について検討しました。

成果の内容

- 4年間運用した杉皮バークでは、排液のECが高く、pHが低くなります。
- 運用した杉皮バークでは、使用1年目に比べると2番花の開花が遅くなり、2月以降に減収します。
- 1年目の県内に流通しているイチゴ用培地と杉皮バークでは同等の収量が得られます。

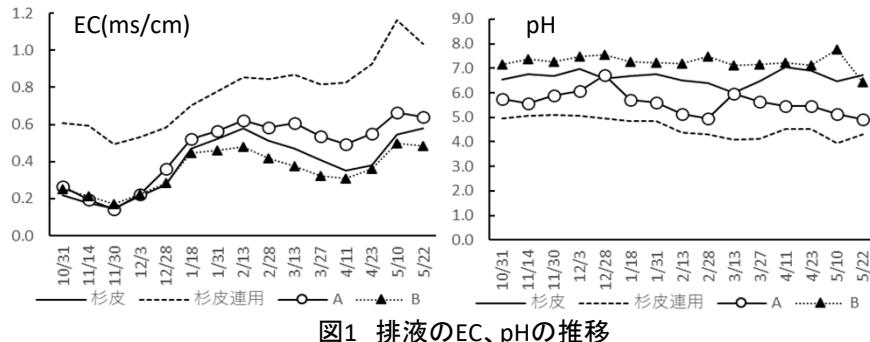
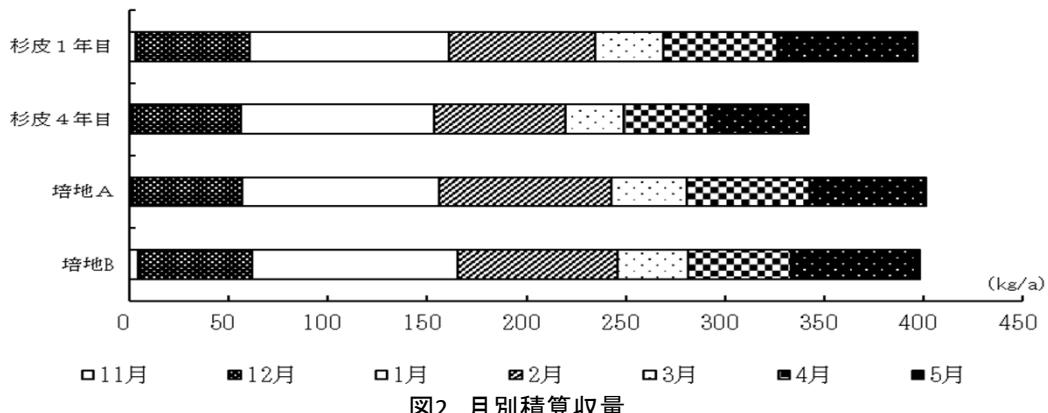


図1 排液のEC、pHの推移



成果の活用方法(又は期待される効果)

- 高設栽培の適正な給液管理や栽培指導に活用できるので、県内高設栽培イチゴ産地において、栽培管理の改善、品質や収量の安定・向上が見込めます。
- 普及対象地域・面積 県内のイチゴ高設栽培地域

留意点

- 栽培品種は「さがほのか」、基肥はリニア型肥効調節型肥料40日タイプ(N:P2O5:K2O=13:9:11)を株当たり3.8g(窒素成分0.5g/株)、追肥はOK-F-1の2000~3000倍溶液で行いました。排液EC及びpHを把握しながら給液管理を行う際の目安は、排液ECは0.3~0.6mS/cm、pHは5.5~6.5とします。
- 杉皮バーク(50mmメッシュ、300円/40L)、高設イチゴ用培地A(1535円/40L)、高設イチゴ用培地B(550円/20L)

関連研究成果カード：令和元年後期 番号10

関連事業名：イチゴの周年出荷と安定生産を確立するための新品種育成と栽培技術の確立事業(県単)

研究期間：平成30年